

19 世紀前期ドイツ語圏における合唱運動の興隆

—— C. F. ツェルターの活動を中心として ——

関 口 博 子

1. はじめに

19 世紀前期のドイツ語圏では、合唱運動が興隆していた。ピールジッヒ (Fritz Piersig) によると、北ドイツのそれはツェルター (Carl Friedrich Zelter, 1758-1832) の、南ドイツおよびスイスのそれはネーゲリ (Hans Georg Nägeli, 1773-1836) の活動の影響を強く受けている⁽¹⁾。

筆者はすでに、スイスの男声合唱運動とネーゲリの合唱活動との関係については別稿⁽²⁾において考察している。本稿では、19 世紀前期ドイツ語圏における合唱運動のもう一つの拠点である北ドイツのツェルターの活動に焦点を当てる。19 世紀前期ドイツ語圏における合唱運動については、数多くの先行研究が存在し⁽³⁾、そこにおいてツェルターもネーゲリも取り上げられている。しかし、両者の合唱活動の性格的な相違、ツェルターの影響を受けた北ドイツの合唱運動とネーゲリの影響が強いとされる南ドイツの合唱運動との性格的な相違⁽⁴⁾を、当時歌われた合唱曲のレパートリーなどから分析するといった研究は見当たらない。そこで本稿では、まずツェルターの合唱活動について検討した上で、特にドイツの合唱運動の興隆について、その歴史的背景を踏まえながら、北ドイツの男声合唱団、南ドイツの男声合唱団の性格と演奏レパートリーとを比較検討し、その特徴と変遷について考察していきたい。

2. 19 世紀初頭までのドイツにおける音楽活動と音楽教育

裕福な家庭や親しい仲間内での音楽的な集いは、相当以前から存在していたと考えられるが、さらに広範囲の人々をまとめた組織もすでに 17 世紀に出てきている⁽⁵⁾。すなわち、コレギウム・ムジクム (Collegium Musicum) がドイツ各地に設立され、やがて一定の聴衆を持ち、公開のコンサートを行うようになったのである。公開コンサートは、その初期はアマチュアの音楽愛好家達によって行われていた。しかし作品の演奏に対する作曲家の要求がますます高くなってきたことや、完璧なコンサートをめざすようになってきたことから 18 世紀末には演奏は職業化専門化し、職業音楽家だけで形成されたオーケストラが出現してきた。演奏のプロ化によってアマチュア音楽家達は、家庭でのピアノ演奏とともに社交的な合唱サークル、合唱団に活動の場を見出だすようになる⁽⁶⁾。特にこの傾向は、1820 年頃から顕著にみられるようになった⁽⁷⁾。

合唱サークルは、コンサート組織にやや遅れてもっと気楽な、家庭的な雰囲気の中かでいわば自然発生してきたものである。大衆娯楽がまだ登場せず、オペラはまだ上流階級のものであった 18 世紀にあって家庭的な交際や社交的な集まりは、人々の生活の中かで大きな役割を有していた。合唱サークルや人々の私的な集いでは世俗的な曲も宗教的な曲も歌われていたが、世俗的な曲としては合唱リートや単声のリート、ルントゲザング (Rundgesang)⁽⁸⁾ などが好んで歌われていた。合唱リートは、17 世紀以来ほとんど衰退していたが、「食卓のリート」として再びはやるようになり、19 世紀の男声合唱への道を開いた。ルントゲザングも、集いの形式および社交上の意図をよく反映したものとなっている。ライヒャルト (Johann Friedrich Reichardt, 1752-1814) やヒラー (Johann Adam Hiller, 1728-1804) らによって、小サークルの静かで純粋な楽しみのための世俗的な歌が多数作曲されているが、18 世紀にドイツで出された世俗

的な歌のうち最も好んで歌われ、最も多くの歌をまとめた歌集としては、シュルツ（Johann Abraham Peter Schulz, 1747-1800）による『民謡調の歌曲集』（Lieder im Volkston, 1782/85/90）が挙げられるであろう⁽⁹⁾。

シュルツやライヒャルトらによって数多くの歌唱作品が提供され、人々の音楽活動が盛んになり、やがて私的な歌の集いが合唱サークル、音楽協会へと組織化されてくると、その音楽協会を母体とした音楽教育機関が生じてきた。この点で顕著なのは、ヒラーの活動である。彼は、コンサートをよりしっかりとした広い基盤の上におくために 1771 年に歌唱学校を設立している。この学校は数人の少年の指導から始まったが、やがて女性が入学し、3 つのクラスを持つ音楽学校へと発展している。そして音楽学校の生徒の勉学を励まし、さらにその両親や友人達に彼らの手腕を聴いてもらうために彼は、1775 年に「音楽実践協会」（Musikübende Gesellschaft）というコンサート組織を設立している。このようなコンサート組織から生じた歌唱学校は、次第に自立したものとなっていく。1806 年の『一般音楽新聞』（Allgemeine musikalische Zeitung）誌上においては、ホルスティヒ（Horstig）が町の公私コンサートに優れた合唱団や合唱団員が欠けていることを嘆き、歌唱学校の必要性を訴え、ハイデルベルクに歌唱学校を設立する具体的な方策を論じている。そこにおいて彼は、広範な市民の家庭に良い歌を広め、優れた歌唱力を育成することのできる歌唱学校の設立を推奨している⁽¹⁰⁾。

3. ツェルターの合唱活動

(1) ベルリン・ジングアカデミーにおける混声合唱の活動

著名なベルリン・ジングアカデミーも元々は、ファッシュ（Carl Christian Friedrich Fasch, 1736-1800）が、1787 年に開設した裕福なブルジョワの女性のための歌唱クラスに端を発している。そしてファッシュの後を受け継いだツェルターが、このアカデミーをさらに発展させている。

ツェルターは、バッハのような古い音楽の演奏家を育成するための機関としてコレギウム・ムジクムをアカデミーの付属機関といった形で設立し、バッハの声楽作品をファッシュ以上に多く取り扱い、バッハ復興運動の一翼を担った。彼の活動が、1829年のメンデルスゾーンによる《マタイ受難曲》復活上演への素地となったことは間違いないであろう。ツェルターは、ジングアカデミーのために数多くの合唱曲を作曲しており、ジングアカデミーではアカペラの古いモテットや他の多声の歌、同時代の巨匠の作品（ハイドンのオラトリオなど）とならんで、ツェルター自身の作曲による大規模なオラトリオ様式の作品（《復活と昇天》（Die Auferstehung und Himmelfahrt）など）も演奏されている⁽¹¹⁾。ジングアカデミーは、音楽的な準備教育がなされていれば男性でも女性でもメンバーの人数制限がなかったため、そのメンバー数はツェルターが亡くなった1832年には359人にも膨れ上がっていたという⁽¹²⁾。アカデミーでは、大規模な混声合唱作品を演奏しており、なかでもオラトリオは重要な演奏レパートリーの一つであった。オラトリオの上演は、19世紀前期のドイツではブームといえるほど人気を呼び、大人数の合唱団員と大人数の聴衆で、会場が埋め尽くされたという⁽¹³⁾。

(2) リーダーターフェルにおける男声合唱の活動

リーダーターフェルは、ジングアカデミーとは別にツェルターが独自の活動の場として1809年に設立した男声合唱団である。それは、1808年の5月にジングアカデミーのメンバーであったグレル（Otto Grell）がベルリンを去るときの送別会で、そこに居合わせたジングアカデミーの男性達が食卓を囲んで、ツェルターなどの作ったリートを歌ったことが発端となって設立されたものである。リーダーターフェルは、その名の通り食卓（Tafel）を囲んでの歌の集いであって公に演奏することは目的としていない。リーダーターフェルのメンバーは会則によって24人と制限されており、後にメンバーの候補者としてさらに5人まで受け入れたが、メンバー

の数は 30 人を超えないようにされていた⁽¹⁴⁾。そしてメンバーは、歌手か詩人か作曲家でなければならないとされ、彼らはリーダーターフェルのために自ら歌を作り、それらの歌を『歌集』(Liederbuch) に収めて演奏レパートリーとして歌っていた。次ページの〈表 1〉は、ツェルターのリーダーターフェルの演奏レパートリーである。もちろん、ツェルターの歌が最も多いのだが、なかにはリーダーターフェルのメンバーがリーダーターフェルのためだけに作ったものもあり、公に発表されていないものも含まれている。リーダーターフェルは、その設立の当初は 2 声、3 声のリートや、ソロのパートから始まりリフレインを合唱が受け持ったりするような合唱曲がよく歌われていた。そしてリーダーターフェルの発展に伴って、次第に無伴奏の 4 声体の合唱曲が主流となっていたのである。歌われていた歌の特徴としては、社交的な内容の歌が多いことが挙げられる。〈表 1〉の歌のタイトルだけでは見極めは難しいかもしれないが、《合唱団員の夜の祝い》《なごやかに歓談しよう》《陽気な酒飲みの信の置ける人気者》《男性のための酒の歌》《友情の歌》など、タイトルから明らかに社交の歌と分かるものの他、《別れの歌》《無事のご旅行を》《饗宴》《食卓の歌》なども社交の歌であり、〈表 1〉に挙げたもののうち、約半数が社交をテーマとした歌である。その他、レパートリーにラテン語の歌詞を持つ歌が数曲含まれていることも特徴の一つと言える。

リーダーターフェルの最大の特徴は、その排他性にある。人数制限を設けていること、そしてメンバーになるためには音楽的能力などが要求されていることから、ツェルターのリーダーターフェルは、教養エリート層の一種のステイタス・シンボルであったとみなしてよいであろう。それはまたツェルターが、多くの人々を結びつけ、合唱を通して相互のコミュニケーションをはかるということよりもむしろ、限られた音楽的な素養を持つ人々だけで十分に洗練された音楽的な質の高い合唱をめざしていたということの意味しているとも言えるであろう。

ツェルターのリーダーターフェルは、ベルリンを超えて広い範囲で知ら

〈表 1〉 ツェルターのリーダーターフェルの主な演奏レパートリー

作 曲 者	曲 名 (日本語訳)
Zelter, Carl Friedrich (1758-1832)	Der König soll leben (王は生きているだろう), Abschiedslied (別れの歌), Glück auf die Reise (無事のご旅行を), Bundeslied (同盟歌), Das Gastmahl (饗宴), Tischlied (食卓の歌), Besuch (訪問), Heiligen 3 Königen (聖なる3人の王), Ergo Bibamus, Vina bibunt homines, Vernus memorials …他 100 曲以上
Rungenhagen, Karl Friedrich (1778-1851)	Lehre (教え), Domine salvum fac regem, Sängers Nachtfeier (合唱団員の夜の祝い), Die Musica, Laßt euch traulich sagen (なごやかに歓談しよう), Das Leben gleicht der Blume (人生は花と同じである) …他 50 曲以上
Flemming, Friedrich Ferdinand (1778-1813)	Integer vitae, Necklied (からかいの歌), Erfindungen (発明), Hoch lebe der Meister der Tafel (食卓のマイスターは高尚に生きよ) …他
Hellwig, Ludwig (1773-1838)	Lob des Gesanges (歌の賛美), Gesang und Wein (歌とワイン), Lieb und Hoffnung (愛と希望), Bauernhochzeit (農夫の結婚式), Immer lachen immer weinen (いつも笑い、いつも泣く) …他
Wollank, Fr. (1782-1831)	Der traute Liebbling froher Zecher (陽気な酒飲みの方の置ける人気者), Aufgehenden Mond (昇る月), Vanitas, Lust am Weine (ワインの楽しみ), Die goldene Zeit ist nicht entschwunden (黄金の時は消え去らない) …他
Rietschel	Trinklied für Männer (男性のための酒の歌), Lied der Freundschaft (友情の歌) …他

* 本表は、以下の文献を参考に作成したものである [作成：関口]。
 Kötzschke, *Geschichte des deutschen Männergesanges*, S. 59-63.
 Dietel, *Beiträge zur Frühgeschichte des Männergesanges*, S. 34-42.

れるようになったが、人数制限を設けているため、そのメンバーになることは容易ではなかった。しかし著名な音楽家や詩人などは、ゲストとしてリーダーターフェルに招待されることがあった。そうしたゲストを招いての集いをガストターフェル (Gasttafel) と言う。ガストターフェルは、詩人のケルナー (Theodor Körner, 1791-1813) や作曲家のカール・マリア・フォン・ヴェーバー (Karl Maria von Weber, 1786-1826) などのために開かれている。またツェルターは、そうしたリーダーターフェルにゲ

ストを歓迎するための歌も作っている。ガストターフェルを設けていることからツェルターのリダーターフェルは、排他的とはいっても完全に外への窓口を閉ざしてしまっているわけではなかった。1810 年代後半以降、ツェルターのリダーターフェルをモデルとした合唱団がドイツ各地に次々と設立された。

4. ドイツの男声合唱運動の特徴と変遷

—ツェルター、ネーゲリとの関係—

ところで、ツェルターがベルリンにおいて合唱活動を行っていたのとはほぼ時を同じくして、スイスにおいてもネーゲリが、チューリッヒを拠点に積極的な合唱活動を展開していた。ネーゲリは、1805 年に約 30 名の男女からなる混声合唱団として「チューリッヒ歌唱協会」(Das zürcherische Sing-Institut) を設立し、それに間もなく子どもを対象とした教育部門と 15 歳前後の女子からなる女声合唱の部門を設けた。彼が歌唱協会に子どもを対象とした教育部門を設けたのは、合唱を行うための基礎能力を子どものうちに身につけさせようという彼の教育理念に基づいている⁽¹⁵⁾。このようにネーゲリは、最初は男声合唱を行っておらず、彼が男声合唱を行うようになったのは 1810 年からであったが、男声合唱を行うようになってからは人数もかなり増えてきた。というのもネーゲリは、音楽を民衆全体の共有財産 (Gemeingut) にするということを民衆教育の究極の目的とし、それには合唱が最も有効であると考えていたため⁽¹⁶⁾、ツェルターのリダーターフェルのように人数制限を設けることはしなかった。ネーゲリの影響を受け、1820 年代にはスイス各地に男声合唱団が設立されるようになるが、ネーゲリの影響は、スイスにとどまらず、ドイツにまで及んでいる。

北ドイツの男声合唱団は、ツェルターのリダーターフェルに倣ってその多くがリダーターフェルという名を冠している。北ドイツのリダーターフェルは、基本的にはツェルターのそれと同様、排他性を特徴とし、

少なくともその設立時においては、そのほとんどが人数制限を設けていた⁽¹⁷⁾。一方、南ドイツの男声合唱団は、リーダークランツ (Liederkrantz) という名を冠したものが多く、民衆教育の一環として合唱を位置づけて大人数での合唱を推奨していたネーゲリの影響を強く受け、「人数制限を設けない」、「積極的に公開での演奏を行う」など、ツェルターのリーダーターフェルとは正反対の特徴を有していた。ネーゲリは、1819 年から 1825 年にかけて音楽に関する講演を行うためにシュトットガルト、チュービンゲンなどを訪問しているが、その際に彼は、シュトットガルト等のリーダークランツの設立に直接、関わっている⁽¹⁸⁾。よってドイツ語圏の男声合唱運動は、ベルリンのツェルターとチューリッヒのネーゲリという 2 人の音楽家の活動を起点として、ほぼ同時期に性質の異なる 2 つの運動として出発したものとみなしてよいであろう。

さて、ドイツ語圏において男声合唱運動が興隆したのは 1810 年代後半から 1820 年代にかけてである。この時期になぜ、男声合唱運動が興隆したのか、それには当時の音楽状況と社会状況が大きく関わっていたと言えるであろう。まず、1810 年代から 1820 年代にかけての音楽愛好家達の音楽的環境をめぐる変化としては、先述の通り、アマチュアオーケストラの解散という状況がある。演奏技術の向上からそれについていけなくなったディレクタント達は、オーケストラから合唱へとその活動の領域を移行してゆき、特にそれが 1820 年代に顕著になったとされている。

そして、1810 年代から 1820 年代にかけての社会的な状況としては、周知の通り、対ナポレオンの解放戦争からウィーン体制の時代にあたるということがある。1806 年、ドイツではフランスとの戦争の結果、神聖ローマ帝国は名実ともに滅亡し、ナポレオンによりライン同盟が結成される。プロイセンは、イエナ・アウエルシュテットでみじめな敗北を喫し、フランスの支配下に置かれる。このような状況の下、1806 年から 1807 年にかけて行われたフィヒテ (J. G. Fichte, 1762-1814) の講演『ドイツ国民に告ぐ』は、ドイツ国民の精神的覚醒を訴え、ナショナリズムの高揚をもた

らしている。1812 年のモスクワ遠征失敗を機に、解放戦争が起こり、ナポレオンは没落する。ナポレオン没落後のヨーロッパの秩序回復を話し合ったウィーン会議（1814-1815）に基づき、ヨーロッパ各国はフランス革命以前の秩序に戻すことが決議され、復古の時代を迎える。いわゆるウィーン体制である。この反動の時代で政治的な活動が制限されていたため、人々は、文化的な活動にその精神的な発露を求めたと言えるであろう。ドイツではその代表がブルシェンシャフト（Burschenschaft）の運動（＝学生運動）である。しかし、このような時代にあってもツェルターのリーダーターフェルは、社交的な歌が多いというその演奏レパートリーからも明らかな通り、政治的な関心は薄く、祖国愛を王への忠誠と同化していた⁽¹⁹⁾。その一方で、例えば 1819 年に設立されたベルリンの第 2 のリーダーターフェルは、解放戦争の精神から出発し⁽²⁰⁾、ツェルターのリーダーターフェルより愛国的な色彩を強めている。全般的に、ツェルターのリーダーターフェルをモデルとして 1810 年代後半以降に各地に設立されたリーダーターフェルは、その設立時には 10 数名から 20 数名という人数制限を設けるなど、その排他性を受け継いだが、その人数制限も、ツェルターのリーダーターフェルほど厳格ではなく、次第に枠が拡大され、撤廃される方向に進んでいった。ネーゲリの影響を受けて南ドイツに設立されたリーダークラントは、最初から人数制限を設けなかったもので、例えばシュトゥットガルトのリーダークラントでは、設立後まもなくその人数は 80 人になり、すぐに 150 人にも膨れ上がったとされている⁽²¹⁾。

次ページの〈表 2〉は、19 世紀前期に設立された主な男声合唱団の演奏レパートリーをまとめたものである。ここで明らかにできたのは、各合唱団で作られた『歌集』に含まれる曲や、ガストターフェル、公開演奏会などを催した場合のプログラムなどに限られるが、〈表 2〉からは、特に、G. ライヒャルト（Gustav Reichardt）の《祖国ドイツとは何か》（Was ist des Deutschen Vaterland）が、ここに書いた 5 つの団体のなかだけで少なくとも 3 つの団体で歌われていたことが明らかになっており、多く

〈表2〉 19世紀前期ドイツにおける主な男声合唱団の演奏レパートリー
(ツェルターのリーダーターフェルを除く)

団体名	作 曲 者 名 : 曲 名 (日本語訳)
Leipzig LT	Schneider, Friedrich (1786-1853): 32 Lieder Schulz, J. Ph. Chr.: Generalbeichte (総告白), 25 Lieder Rochlitz, J. Friedrich: Hoch lebe deutscher Gesang (ドイツの歌は高尚であ れ), Wer nicht liebt (愛さない人は) Fink, G. W.: 25 Lieder/ Dörrin: 15 Lieder/ Kunze, W. F.: 11 Lieder/ 他
Jüngere LT (Berlin)	Reichardt, Gustav (1797-1884): Was ist des Deutschen Vaterland (祖国 ドイツとは何か) Berger, Ludwig (1777-1839): Andreas Hofer, Neuen Pfingsten (新精霊降 臨祭), Theodor Körner Klein, Bernhard (1793-1832): Der Herr ist mein Hirt (神は私の指導者で ある), Wie mir deine Freuden winken nach der Knechtschaft, nach dem Streit (隷属と戦いの後に、私にどのような喜びが待ち受けていると いうのか) Rungenhagen: Marschall Vorwärts (前へ進め) /他
Münster LT	Reichardt, G.: Was ist des Deutschen Vaterland Zelter: Der deutsche Zecher (ドイツの酒飲み) Nägeli: Zuruf an das Vaterland (祖国への呼び掛け) Tauwitz: Lebewohl ans Vaterland (祖国にさよなら), Barcarole Zöllner, Karl Friedrich (1800-1860): Jägerchor (狩人の合唱) Choral: Befiel Du Deine Wege (君は君の道にゆだねよ) Lindpaintner: Liebesklage (愛の嘆き) Kreutzer, Conradin (1780-1849): Das ist der Tag des Herrn (それは神の 日である) /他
Stuttgart LK	Silcher, Ph. Friedrich (1789-1860): Wir sind ein festgeschlossener Bund (我々はかたく結ばれた同志である), Jetzt gang i ans Brünnele (今私は Brünnele へ行く) Reichardt, G.: Was ist des Deutschen Vaterland Haydn, Joseph (1732-1809): Deutschlands Ruhmesglanz und Ehre (ドイ ツの栄光と誉れ) /他
Nürnberg LT	Kreutzer: Jägerlust (狩人の楽しみ), Der Gesang Schneider: Der deutsche Mann (ドイツの男性) Blumröder: Kriegerleben (戦士の人生) Deutscher Sängerbund (ドイツの合唱団) Berner, Friedrich, Wilhelm (1780-1827): Männergesang/ Koehler: Hymne Miller, Julius: Vater Unser (主の祈り) Stunz: Heldenempfang auf Walhalla (Walhalla からの英雄の歓迎) /他

(略語) LT=Liedertafel LK=Liederkranz

* 本表は、以下の文献を参考に作成したものである [作成: 関口]。

Köttschke, a.a.O., S. 70-77. Dietel, a.a.O., S. 68-125.

の団体で好んで歌われていたことがうかがえる。《祖国ドイツとは何か》は、アーンツ（Ernst Moritz Arndt）が 1813 年に書いた詩に、ベルリンで指揮者と唱歌教師として活躍していた G. ライヒャルトが 1825 年に曲をつけたものである。この歌は、1830 年代から 1870 年代にかけて最も広まったドイツの歌のひとつで、祖国統一の願いをその歌に込めるという政治的な意味合いを持つ歌となったとエルク（Ludwig Erk）は述べている⁽²²⁾。この歌は、『一般ドイツ学生歌集』（Allgemeines Deutsches Kommersbuch）にも載せられている。他の曲をみても、全体的にどこの合唱団でも“Vaterland（祖国）”とか“Deutsche（ドイツの）”とか“Bund（同盟）”などがタイトルに含まれるものが多く、タイトルからしてすでに愛国的な内容を連想させる歌が、どの団体にもレパートリーとして含まれていたことがうかがえる。したがって、ツェルターの影響によって設立された北ドイツのリーダーターフェルも、ネーゲリの影響による南ドイツの合唱団も、ともに愛国的な歌を多く歌っていたということが明らかになるであろう。

ところで、複数の合唱団が集まって行う合唱祭は、1820 年代後半以降、南ドイツの各地で行われるようになり、北ドイツでも 1830 年代以降、頻繁に行われるようになった。そこで歌われた歌は、北ドイツも南ドイツも愛国的な歌が多く、参加人数は、明らかにできたものだけで 200 人から 760 人まで⁽²³⁾、いずれも数百人単位のたいへん大規模なもので、さらにその他に、その何倍もの聴衆がいた。

以上のことから、最初は性質の異なる運動として出発した北ドイツと南ドイツの男声合唱運動は、次第に類似した性質のものとなっていったとみなしてよいであろう。ツェルターの設立したリーダーターフェルは、1839 年 7 月 9 日、ポツダムのリーダーターフェルと合同演奏会を開催している。それがベルリンのリーダーターフェルにとって最初の合同演奏会であったが、1839 年といえどツェルターはすでに亡くなっており、ツェルター存命中にはそれができなかったことを示しているとも言える。

ツェルターは、あくまでリーダーターフェルを音楽的な素養を持つ教養

ある人々を社会的に結びつけるものとみなし、食卓を囲んでの私的な音楽活動に限るものととらえて公での演奏を否定していた。ガストターフェルを設けるなど、外に向けての窓口をまったく閉ざしていたわけではないが、それでもツェルター自身は、南ドイツのリーダークランツの設立に直接関わったネーゲリほどには、自らの男声合唱の活動を広範に広めようという積極的な意図はなかったのではないかと思われる。しかし実際には、少なくとも北ドイツにおいて男声合唱運動発展の契機を与えたのは、ツェルターであったとみなしてよいであろう。したがってツェルターのリーダーターフエルにおける合唱活動は、結果的に北ドイツの男声合唱運動に契機を与えることにはなったものの、実際のドイツの男声合唱運動は、1810年代後半から1820年代という時代の影響をきわめて強く受け、大人数で愛国的な歌を歌うという、ツェルターの活動とはかなり性質の異なる方向に進んでいったと言えるであろう。

註および引用文献

- (1) Piersig, Fritz. "Männerchor," *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, vol. 8, 1960, Sp. 1461.
- (2) 関口博子「H. G. ネーゲリとスイスの男声合唱運動－19世紀前期スイスにおける音楽と社会の一側面－」日本音楽学会『音楽学』第47巻1号、2001年、27-39頁。
- (3) 19世紀前期ドイツにおける男声合唱運動に焦点を当てた先行研究としては、以下のものなどがある。
Dietel, Heinrich. *Beiträge zur Frühgeschichte des Männergesanges*, Würzburg: Buchdruckerei Richard Mayr. 1939.
Kötzschke, Richard. *Geschichte des deutschen Männergesanges hauptsächlich des Vereinswesens*, Dresden: Wilhelm Limpert-Verlag. 1927.
- (4) 筆者は、合唱活動と合唱運動とは、以下のように使い分けている。すなわち、合唱活動とは、一人の合唱指揮者、指導者による活動を指し、合唱運動とは、個人による活動を超え、ある地域で合唱が盛んになっていく大きな流れのことを指す。

- (5) 集いと組織の違いについては、以下のように定義している。すなわち、集いとは、ごく小さな個人的な集まりを指し、組織とは、ある程度の人数が集まって規範などもできたやや公的なまとまりを指す。
- (6) 筆者は、合唱サークルと合唱団について、以下のように使い分けている。すなわち、合唱サークルとは、ごく小さな私的な合唱を歌う集いであり、そこには何も規範のようなものはない。一方、合唱サークルよりは規模が大きく、規範ができたりして公的な性格を持つようになり、広く世間にその存在が知られるようになったものを一般的に指して合唱団とする。
- (7) 19 世紀初頭の演奏のプロ化とアマチュアオーケストラの解散が、合唱団の発展に有利に働いたことは、ネーゲリが 1826 年の「チューリッヒ市合唱協会」(Sängerverein der Stadt Zürich) 設立の記念講演において述べている。
Nägeli, Hans Georg. "Nägeli's Rede vom 11.10.1826," *Alpenrosen*, 4Jg., 1869, S. 122.
- (8) Rundgesang は、多くの独和辞典で「輪唱」と訳されている。輪唱というのはいわゆるカノンのことであるが、それに対して Rundgesang は、詩節の部分をソロ（またはソリ）が、リフレインを合唱が歌うという形態の歌であり、したがって輪唱とはまったく異なるものである。このような形態を持つ Rundgesang にふさわしい訳語がないため、筆者はそのままレントゲザングとしている。
- (9) シュルツの『民謡調の歌曲集』について筆者は、以下の別稿において詳細な分析を行っている。
関口博子「J. A. P. シュルツ『民謡調の歌曲集』の特徴－18 世紀後半のドイツにおける民衆啓蒙と音楽教育との関わりを視点として－」『新 モーツァルティアーナ 海老澤敏先生傘寿記念論文集』音楽之友社、2011 年、614-624 頁。
- (10) Horstig, "An die Stifter einer neuen Gesangsschule zu Heidelberg," *Allgemeine musikalische Zeitung*, 1806, Sp. 817-822.
- (11) ツェルターがジングアカデミーの合唱指揮者をしていた 1800 年から 1832 年までのジングアカデミーにおける彼の演奏活動については、以下の文献に詳しい。
Schünemann, Georg. *Die Singakademie zu Berlin 1791-1941*, Regensburg: Gustav Bosse Verlag, 1941, S.23-65.
- (12) Raynor, Henry. *A Social History of Music*, New York: Taplinger Publishing Co., 1978, p. 87.
- (13) 当時のオラトリオの盛況ぶりについては、以下の文献に詳しい。
西原稔『聖なるイメージの音楽－19 世紀ヨーロッパの聖と俗－』音楽之友社、1990 年。

- (14) ツェルターがなぜ、リーダーターフェルの人数を 24 人と制限していたのか、30 人を超えないようにしていたのか、その理由については彼自身何ら言及していないため、はっきりしたことはわからない。したがって推測の域を出ないが、人数を制限することで演奏のレベルを保つ、各パートのバランスを保つ、などが理由の一つとして考えられるであろう。
- (15) Nägeli, *Organisation des Sing-Instituts, so wie dieselbe jedes Mitglied angeht*, Zürich: Bey H. G. Nägeli, o. J., S. 3-7.
- (16) Nägeli, "Die Pestalozzische Gesangbildungslehre nach Pfeiffers Erfindung kunstwissenschaftlich dargestellt im Namen Pestalozzis, Pfeiffers und ihrer Freunde," *Allgemeine musikalische Zeitung*, Sp. 833.
- (17) Dietel, a.a.O., S. 68-95.
- (18) Ebenda, S.103.
- (19) Ebenda, S.40.
- (20) Ebenda, S.79.
- (21) Ebenda, S.103.
- (22) Erk, Ludwig (hrsg.). *Erks Deutscher Liederschatz: eine Auswahl der beliebtesten Volks-, Vaterlands-, Soldaten-, Jäger-, Studenten- & Weihnachts-Lieder für eine Singstimme mit Pianofortebegleitung*, Bd. 1, Leipzig: C. F. Peters., o. J., S. 269.
- (23) Dietel, S. 99-150.

付記：本稿は、平成 20～24 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））〔課題番号：20520140〕の助成を受けた研究成果の一部である。